２０２１年3月3日

岐阜県議会議長　森　正弘 様

請願団体　　河口堰に反対し、長良川を守る岐阜県民の会
代表者　　山内克典
住所　岐阜市徹明通７－１３（岐阜県教育会館・４０４号）

紹介議員　中川 裕子

長良川河口堰の運用見直しとゲートの試験的開放の議決を求める請願

請願の趣旨

長良川河口堰は、１９９５年７月に本格運用が開始されて２６年目を迎えています。この間、環境、利水、治水等において多くの問題が提起されています。

第１に、国など当局は「ゲートを開放すると**『塩害』**がおきる」の一点張りですが、いまだ実際に調査した上での実証的見解を出していません。河口堰をつくる前から河口から１５km付近のマウンドを越えて塩水が遡上していたことは当局の調査報告でも明らかで、マウンドを撤去しても上流からの流れがあるため、塩水が水平（くさび状）に遡上することはなく、マウンドから最大１．５kmの遡上延長があるのみだと専門家が分析しています。これらのことから、河口堰が「塩害」を防いでいるとは言えません。

第２に、環境問題です。河口堰によって汽水域が破壊され、ヨシ原は 90 %以上が消滅し、ヤマトシジミは全滅しました。岐阜県民にとって最も重大なことは、清流長良川のシンボルであった本物の天然アユへの影響です。いまや長良川にいるアユのほとんどは、放流ものであり、本物の天然アユは激減しています。サツキマスもゲート閉鎖以前は毎年一千尾超の漁獲量（38 km地点）がありましたが、今日では数十尾になっています。

長良川水系の漁協では、苦肉の策として、養殖アユを一定期間長良川で泳がせたら、それを「天然アユ」として出荷しています。さらに漁業不振は長良川沿川の各種観光業の営業に深刻な影響を及ぼしています。各漁協の多くの組合員・釣り人、観光業者や住民・市民は、「せめて天然アユが登り降りする時だけでも、ゲートを開放できないか」と切実な声を上げています。このように河口堰が環境を悪化させてきたことは明々白々な事実です。

第３に、当局は建設計画の途中から「利水」に加えて**「治水」**が主要な目的だといいはじめ、一定の浚渫を行い、河道を大きくしました。しかし、河口堰自体は川の流れを妨げる構造物であり、地震・津波時、洪水時、高潮時等に非常に危険な障害物となります。

河口堰建設の当初の目的であった**「利水」計画は、**工業用水がこの間一滴も売れていないなど、完全に破綻していることは言うまでもありません。

２０１５年１２月、国連食糧農業機関は、「清流長良川の鮎」を世界農業遺産として認定しました。このことからも国・当局には、尚一層「清流長良川」に本物の天然アユがもどってくるようゲートを開放することが強く求められています。

世界に誇る清流・長良川を取り戻すために私たちは次の請願を行う次第です。

請願の項目

１．河口堰の運用見直しに向けた調査に着手し、農業用水を使用しない期間にゲートを試験的に開放して「塩害」について実証的調査を行うこと。

２．河口堰のゲートを開放し、清流長良川をとりもどすこと。

以上の２項目全部または１部を国に対する意見として議決すること。　　以上